アグアスカリエンテスにおける日墨国際理解の実践

── 和太鼓を使って ──

前アグアスカリエンテス日本人学校　教諭
京都府京都市立京北第三小学校　教諭　中　嶋　美智子

キーワード：在外教育施設，メキシコ，国際交流，文化交流，総合的な学習，和太鼓

１．はじめに

陽気で元気なメキシコ人。しかし児童・生徒や派遣教員とメキシコ人との対等な交流は多いとは言えないのが現状であった。日本人の家のお手伝いさんや警備の仕事の方，販売員の皆さんとの交流が主であった。

赴任当時はまるで呪文のようだったスペイン語だったが，自分のスペイン語が上達するにつれ，メキシコ人が日本に大変友好的な感情を抱いていることがわかった。日系メキシコ人との交流もあり，これまでの日本とメキシコとの歴史の繋がりの強さを感じることとなった。

「メキシコ人と日本人の対等な交流ができれば」と思い，日本で学んできた和太鼓をツールに交流を進めた。ここにその概略を紹介したい。

２．地域での和太鼓教室

始めはメキシコ人のパーティがある度にバケツとおたまで演奏していた。途中でバケツが割れ，おたまが何本も折れていった。その甲斐あってか和太鼓とは一体何なのかよく分からないながらも，「私もやってみたい」という好奇心旺盛なメキシコ人女性の希望で教室を始めた。2 人のメキシコ人と私。3 人だけの太鼓教室が始まった。

＜練習に励む「響」のメンバー＞

道具が十分でないので，椅子の背もたれやダイニングテーブルに毛布をかけて練習をした。幼児の頃からダンスや歌うことを身に付けているメキシコ人が多いので，リズムの飲み込みが早い。

数ヶ月すると，日本人からも「和太鼓を日本でも叩いてみたいと思っていた。仲間に入れてほしい」という要望があった。そのため，既に数曲をマスターしたメキシコ人が日本人に和太鼓を教え始めた。日本人がメキシコ人に和太鼓を「習い」始めたのである。

３．和太鼓グループ「響」の活動

2011年 3 月現在，教室の生徒は幼稚園児から大人まで約50名にのぼり，日本人学校の保護者，親日家のメキシコ人を中心に演奏活動を続けている。和太鼓グループ「響（ひびき）」として地元のアグアスカリエンテス大学での演奏会や，結婚式などでの演奏，アニメフェスタでの演奏，東日本大震災チャリティコンサートなども開催されてい

る。演奏会に来た人からまた次の演奏会のオファーがあり，活躍の場が増えている。日本の一般家庭の日常を表現した小学生による劇，剣道や居合いという日本独自の文化も交え，毎回盛況である。

隣町のグアナファト大学からの要請でグアナファトにて演奏会を開いた。町並みが世界遺産という町での演奏は格別であった。

法被やＴシャツ，和太鼓を手作りし，日本の物がなかなか手に入らないメキシコでも和太鼓が打てるように，また日本文化を広めていけるようにと奮闘した。「昔通訳だったから」「お買い物は任せて」「私の知り合いが大工だから聞いてみます」というように，日本人とメキシコ人がメキシコの素材から和の物を作っていった。

「響」を取り巻く人々の中では，物の交流だけではなく，習字を習ったり，メキシコでの伝統的なクリスマスパーティや伝統食の試食を行って日本人がメキシコ文化を体感するなど，文化交流も広がった。

最近では地元テレビでも紹介されるようになり，更に活動範囲を広げている。

４．日本人学校での取り組み

３年目にあたる2010年度には，児童・生徒にとって，和太鼓演奏は少しずつ身近なものになりつつあった。2009年度の学習発表会では小３，４年生が太鼓演奏を交えた劇を発表した。また，総合の時間を利用して小３，４年生が練習した太鼓演奏を芸術学校でも発表し，「自分も太鼓を叩いてみたい」という気持ちをもつ児童・生徒が増えてきた。

2010年度の総合的な学習では，和太鼓とメキシコの太鼓の演奏を学ぶ学習と和太鼓の歴史や音の仕組みを調べる活動をした。

和太鼓のリズムはメキシコで生まれ育った児童には馴染みのないリズムであった。さらに異年齢集団での活動，また地域での和太鼓経験の有無によりそれぞれのレベルの差が大きく練習形態の工夫が必要となった。そのため児童・生徒の中での教え合いを仕組み，時間の終わりには全員で演奏をするなどの工夫を凝らした。小集団での練習だけではなく全体でその成果を共有することにより，「もっとうまくなりたい」「みんなと力強く演奏したい」というように児童・生徒のモチベーションが上がった。そこから休み時間の自主練習，家庭での練習をした児童・生徒も多かった。

和太鼓の歴史や構造，音の仕組みを学ぶ分野では，和太鼓を調べることによってメキシコの太鼓の歴史や構造と比較することができた。自国の文化を知ることにより，他国の文化理解が深まった。音の振動についての学習をワイングラスを用いて実験をして学習したり，音の高さの変化をストロー笛を用いて確認したりした。太鼓の音の伝わり方にも同じことが言えることが分かり，小学校中学年の児童は大興奮であった。

＜本番に向け練習する児童生徒＞

発表会では自分たちの経験したこと，実験したことを自信をもって発表し，演奏も力いっぱい打つことができた。また特別支援を要するＢ君も参加した。普段は帰りの用意を自分自身で進めることも難しいので，講座を実践していく上でどのように支援していけばよいか心配した。初めは難しかったが，曲が打てるようになったころから，休み時間などに自分自身の姿をガラス

に映し，「どうすればもっとうまく打てるのか」「どんな打ち方が格好いいのか」ということを研究し始めた。自分の目と耳で，自分のパート以外の打ち方も覚え，演奏することができた。

本活動では，演奏だけでなく「道具整備・道具づくり」も行った。和太鼓は１台のみでスタートした講座であったが，日本企業のご協力により缶や皮の提供をしていただいた。それらの材料を用いて児童・生徒自ら太鼓を手作りし，太鼓の構造や材料について知ることができた。「皮ってこんなに伸びるんだね」「けものの匂いがするね」「太鼓の胴を長くしたら，音が変わった」というような発見を数多くしていた。

５．日系メキシコ人

今から100年以上前に日本からメキシコへの移民を決行した人々がいた。その子孫が今でもメキシコで元気に暮らしている。太鼓が縁で彼らから話を聞くことができた。

ロドルフォ　ススム　ハマノ　イシヅ氏の談話

1931年，アメリカとの国境に近いメヒカリに生まれる。父母は山口県出身。1942年に強制的にメキシコシティに集められ，松本氏の農場倉庫にて生活した。

戦後もメキシコシティの日本人と協力して生活した。当時まだ少年であったが，日本人リーダーが言った言葉が忘れられない。「どんなに苦しくとも日本人の誇りを持って生活していこう。嘘やごまかしをせずにみんなで生きていこう」

それから，日本人は彼の言葉通り誠実に暮らした。自分の父親はエプロンを一軒一軒売り歩いたし，農場や会社を経営しているところでは，雇っていたメキシコ人が「ここでは給料のごまかしがない」と驚いていた。そういうところから，日本人はだんだんとメキシコで信用されるようになったと思う。

メキシコでは日本人だといえば大変親切にされる。それは，ハマノ氏の両親の時代から日本人が築いてきた信用があるからではないだろうか。日系メキシコ人についての授業をした際の小学３，４年生児童のふり返りを以下に記す。

- メキシコの名前と日本の名前がまじった名前があることがすごいと思いました。
- 農場で団体で生活したのがびっくりした。
- 国語の時間に「一つの花」を勉強しています。戦争はみんなにとってとても辛いことです。日本とメキシコが友だちのように仲良くしてほしい。
- 日本人はすごいと思った。
- 正直に，嘘をつかないで生きていこうと考えた人がいたから，今自分がメキシコにいるんだということがよく分かりました。日本を発つ時に「日本は幸せな国なんだよ」とお父さんが言いました。だからメキシコに行ったら戦争のようなものがあるのかなとすごく不安でした。でも来てみると，日本と同じぐらい私は幸せです。それはやっぱり勇気を出してメキシコに来た人のおかげだなと思いました。今ここにいられることに感謝します。

６．おわりに

地域で，学校で，メキシコ人と日本人が同じ目線で交流している。「インターネットで調べて太鼓をつくろう」とドラム缶に皮を張ってみたり，ばちを大工さんに作ってもらったり。日本人だけ，メキシコ人だけでは成り立たないことも，お互いの良さを生かせば何とか形になると分かった。

またお互いの文化の素晴らしさを共有する機会も多くあった。「響」のアンケート結果では演奏をするメキシコ人

に「さすが，リズム感がいい！」「体の使い方，見せ方が素敵！」という声が日本人からあったり，「何でもきちんとしているなぁ。」「いつも穏やかで，段取りよく親切。見習いたいよ。」というメキシコ人からの声があったりする。「私たちはお互いの立ち居振る舞いに憧れあってるんです。」というメキシコ人，日本人女性がいたり――。同じ曲を練習し，演奏するからこその連帯感がある。

そして日本人であり，メキシコ人である日系メキシコ人の生き方を学ぶことも，大切なことである。彼らが日本とメキシコの架け橋として果たしている役割は大変大きい。

メキシコが素晴らしい国であることは，日本でテレビを観ているだけではなかなか伝わらない。タコスのとうもろこしの匂いも，メキシコ人の温かいハグも。それが分かってもらえればもっと好きになってもらえるのになぁと思う。日本のニュースに流れるのは事件であることが大変多い。それもあってか，初めはメキシコに観光に来ることをためらってた友人は，1度メキシコに来て以来，メキシコの町も人も好きになったそうである。私が帰国した今も3度目のメキシコ旅行に出かけている。

日本とメキシコがいつまでも友好的な関係を維持できるよう，さらに発展させていけるよう，願ってやまない。そのために何ができるのか…メキシコでたくさんの宝物をもらった私の，「生涯のテーマ」である。